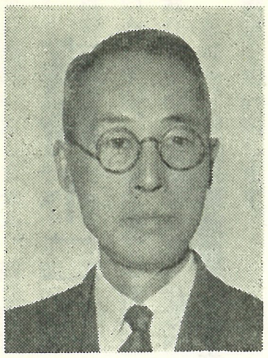
洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

一口に八十年と言えば、長いようであり又過ぎ去ってみれば夢のようなもの。とにかく、よくも生き長らえて来たものと、我ながら感心している次第。

昭和二十三年に大学を停年退官し、やれやれと思っていれば、兵庫県が工業研究所を造るというので、皆様から勧められて引き受けたのはよいが、予算は二億五千万円で相当なものが出来るはずであるのに、役所というところは妙な訳のわからぬことの多い仕組になっていて、建築を始めても金は中々出してくれない。（もっとも当時は不況のどん底であったことも原因していた）余り下げたことのない頭を下げて回り、大変苦労を重ねたのでした。いや、大変な世界もあるものだと、つくづく大学の有り難さを感じました。（これも今はそうでもないようですが）



そのうちに姫路工業大学の学長の席があき兼務せよとのことで、この方は多少自信もあり引受けて七十歳になるまで、どうにか任務を果たしました。兵庫県在職中はずいぶん苦労を重ねたが、今から思えば世の中のことが多少わかったような気がして、有り難い事だと思っています。

それについて今ひとつの収穫は読書の習慣がついたことです。もともと本を読むのは苦痛でなかったのですが、神戸や姫路に通うようになってから十年近くの間、車中混雑の中でむずかしい本を読むのは余り効果がないので、小説、随筆、歴史、伝記などを空席があれば座って、ない時は立ったままで読みふけったものでした。常に文庫本をポケットに入れ随時随所読み続けた結果、かなりの冊数を読破することが出来、しばし本職を離れて気分の転換と精神の修養に役立ったことは今思えば幸でした。

読んだ本といえば、すでにそれまでに読んでいた夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、川端康成など枚挙にいとまない程でありますが更に世界各国の文豪の著作に次々に手を広げて、ほとんど有名な作品は読んでしまった。もっとも同じ読んだと言っても、その神髄に接し得たかどうか疑問でありますが、各国の民族生活、風俗習慣、歴史の背景など、面白く感得することが出来たように思います。

英国の文豪サマーセット・モームが選んだ世界十大小説、ディッケンスのディビッド・コッパーフィールド、ブロンテの嵐が丘、フィールディングのトム・ジョーンス、オースティンの高慢と偏見（以上英国）スタンダールの赤と黒バルザックのゴリオの爺さん、フローベールのボバリー夫人（以上フランス）トルストイの戦争と平和、ドストエフスキーのカラマゾフ兄弟（以上ソ連）メルヴルの白鯨（米国）など、もしまだでしたら読んで面白いかもしれません。文庫文には巻末に訳者の解説がついていますから、それからそれへと読みたい本が出て来るでしょう。

モームの十大小説の選定には私の如きものにも多少の異論がありますが、それはさておき、中国には三国志、水滸伝など雄大なる小説があり、我国にはご承知の如く源氏物語など世界的と言ってもはばからない著作があり、読めども読めども際限がありません。こうなると片っぱしから読みあさるのがよいか、私の如くもともとその方面の素養の乏しいものは、自分の気に入ったものを何度も精読する方が得策であるか、これは各自の判断により適当になさったらよいでしょう。兎に角読書の習慣は一生を通じて有益であり面白く修養の糧にもなる点で、是非お勧めしたいと思います。

車中でよくいかがわしい週刊誌やスポーツ新聞を居眠り半分に読んでいられる人を見受けますが、あれはなんとかならないものかと思いますが、どうでしょう。

これは少し余談になりますが、読書と多少関連していることですが、この頃書画工芸品や骨董が大分流行していまして有名な百貨店や画廊で展覧会が催されています。こういう会場に入るのは楽しいもので、のんびりした気分で作品を鑑賞し、暫くでも世間の雑念から解放されることが出来ることは、何よりの休養になります。

まだまだあります。碁もあり将棋もある。歌舞音曲数えれば数限りなくありますが、皆さんの多くは今仕事で手一杯で、そんな暇はないと言われるかも知れませんが趣味ともなれば時間の多少は都合つくものでしょう。

人間は誰しも年をとるものです何か身についた楽しみを、少しでも若い時から心がけて持ちたいものと思います。

私は八十の手習いを思いたち、一年程前から書と絵のけい古を始めました。楽友会館で一月に一回ずつ書と絵を会員二十名程で練習していますが、この年では中々上達はしませんが結構楽しく年寄弟子の中では精勤なほうで、君は上達が早いなどお上手とは知りながらもやめられません。お客に君よかったら進上するよと言われれば、お礼は言わねばならず、持ちかえらねばならず、さぞ迷惑なことと思います。この際一言お詫びを申し上げておきます。

雑感

関西支部
（大正四年卒）
岡本　赳

真崎不二氏を悼む

東京支部
（明治四十五年卒）
古田正康

昭和四十五年一月二十日、真崎不二氏逝く、その報知に驚き、慟哭

下萌や
先生畏友と
歩みし径　　莫生

の詠みし句をかみしめて、悲しみました。

今日、洛友会山本幹事より、氏の追悼文を書くようにとの申し越しがあり、目を閉じ、共に歩みしありし日の事ども思い出し、ここに記して、追悼冥福をお祈りいたします。

氏は、九州佐賀に生まれ、五高（熊本）に入学、竜田山麓武夫原において、質朴剛健の教育を受け之を卒業、京都大学（当時帝大）に入学、明治四十五年同大学を卒業した当時の秀才であります。

私は五高時代からの友達で、氏の人となりを知っておりますが、氏は実に温健重厚なる紳士でありました。特に私ども同輩が敬愛していたのは、氏の哲学的思想であります。氏は全く自由平和に徹し、所謂、反闘争派、反喧嘩派、反競争派の思想の人で、決して他と争わない。人生無理をしない心を心とする、自然現象認定派の思想を把握している大人でありました。

氏はかかる思想の持ち主であったので、京都大学（帝大）の学風を慕い、入学したと言っていました。これは京都大学の設立の趣旨と其校風が、氏の思想と合致していたからであると思います。其校風なるものを記すると、

京都大学は明治三十年頃大学令により、「本学は学問の奥を極め国家社会に有為の士を教養する学校也」との趣旨を以て設立され、総長木下広次博士は、これに任ずるや訓示して曰く、

「京都帝大に入るものは、其設立の趣旨を体し、知己其分に応じ研学、勉強、学を修め、学に堕せず、学を基として権勢に屈せず、全般に世に役立つ人と成ることを心とすること。」

この訓示は官僚万能、事大集権主義の当時としては、実に大胆な民主自治の精神を普及したる宣言で、引続き菊池総長、久原学長、勝本教授、石坂教授、跡部教授、岡本教授、難波教授、朝永教授、水野教授、青柳教授等々、何れも真崎氏共々私達の、学並びに精神人格の育成に尽された恩師諸賢によりこの訓が守られ、尚これ等諸賢及其薫陶により、民主的に育った優秀学徒たちにより、木下総長の訓示を基として作られた学風＝その骨子は、

一、知己、即ち己を知り、自重自敬、自治に徹す。

これは総長自筆の額に接するとひしひしと感ずる金言。

二、学に堕せず、真に学を学ぶ。

当時国家（行政）は富国強兵に目標を置き、一般人々は立身出世に身を挺するの状態にあり、従って、競争意識烈しくなり、学問も権勢や閥獲得の道筋、或は道具と考えられ勝ちとなることを戒められた訓で、当時もてはやされた儒教（孔孟の教え）の欠点である。画一的教育が生み出した、無理な競争の幣に堕することなく、学徒は唯静かに己の向う学に専心進んで、真に学を学ぶと言う学風。

三、世に役立つ人と成る。

学は唯学んだだけでは何にもならぬ。自己を含めて人の世に役立つように励むこと。それは色々の方面、例えば、物の生産、製造、販売、人の指導、教育、集団の政治経済、人の健康衛生など、あらゆる方面への学の応用、布衍に役立つことを志して、学を消化するよう深く学ぶと言う学風。

上記の如き学風が、千年の古都京都に地を卜したる京都大学に生じたのであります。そしてこの学風を望んで、この学風に合った人々が続々と京都大学へ入学して来たのでありますが、真崎氏もこの学風に合致する思想のひとりとして入学したのであります。そして氏は自分の好きな学（主として電気機器の製造工学）を勉強し、其思想の如く、人と競合うと無く、争わず、一般学科を修了し、明治四十五年京都大学を卒業し、その兄君の経営する郷里佐賀市在の真崎鉄工所に勤め、其電気部門を担当し、漸次同社の経営に参与し、生涯同社の業務に大なる貢献をした、見事な社会人であります。私が見事なと言うのは、徒褒な言ではありません。私が感心するのは京都大学の学風と真崎氏の平和思想の合致（マッチ）と、この思想の実存を氏の一生が見事に完遂したことにあります。即ち当時、生存競争激烈な立身出世遂行の時代に、これを意とせず、争うことなく民間に安座し、その思想＝儒教に反する老荘思想（自然主義）と言うか＝又はサルトルーヤスパースの欧州哲学思想（実存主義）と言うか＝兎に角徹底したる反競争理念＝をもって、一生涯自由に、その主体的実存を通し貫いた氏の実績は、哲学的人生解明の範とすべく、真に見事なものであると考えたからであります。実は前記京都大学の学風を詳記したのも、氏の思想がこれに合致し、そしてそれの実存となり、優秀の果（範）を見せてくれたのに感激したからで……。

氏の霊は、大方、今や競争立身出世主義が下火となり、平和共存自由が尊重されてきた現代の若い学徒に、京都大学の学風（前記創設時の如き学風今尚実存と信ずる）を慕い、自分に右へ習いで、自由で豁達な大学＝京都大学に入り静かに学びなさい、と言っていると思いこれを特記した次第であります。

先年、洛友会の三浦三崎旅行の時、私は氏と同行したが、氏はかかる旅行は同窓生会として甚だ良い催しだと、しきりに感心していました。優しく、友情厚かりしその風貌、今や無し。噫々悲しい哉

ご冥福を祈り奉る。

雑感

九州支部（昭和六年卒）

足立斌

私、現在は九州朝日放送株式会社で専務をいたしております。

洛友会九州支部では何時の間にか古くなり、副支部長をさせられております。併し、学校の方はご無沙汰ばかりで、支部におきましても宮田先輩が支部長として大変お骨折りいただいておりますので遂々その影に隠れて何もいたさず相すまないと思っております。それでも九州支部は、宮田支部長のご発案で時々昼食会などを開いて会員の方々との懇親を深め、時に大学の現状あるいは昔話などが出て、なつかしくかつての電気工学教室を思い出します。

私は今、放送事業を仕事としておりますので遂話はそちらの方にいきますが、この仕事での技術面は特に進歩と申しますか変化が烈しく、戦前はおろか十年前の技術すら通用いたしません。妙な表現ですが、機械の大きさは十年前の半分になりました。真空管回路がIC回路に変わったことなどが、大きく作用しているとは思いますが、こんな言い方がぴったりする状況です。能率の良くなったことは大変なものですが、技術面も細部になると、私共は一寸手が出なくなりました。

大分古い話ですが、終戦当時米軍基地を見学し、いまだに忘れられないことには、通信機の運用と整備を完全に分離していたことです。通信機は現場では修理せず、故障すればブロックごとと言うか通信機ごと取替え、修理は一ヶ所にまとめてするのでした。

物量の米軍のすることぐらいに思っていましたが、私共も真空管時代が去った今になって、やっとその形態を取り出しました。技術の進歩でやっと追いついたということでしょうか。技術の進歩ということばかりでなく、技術運用の能率化につながるのでしょう。

仕事が次第に能率化してくると一つ一つ補修して使用するのではこの技術進展の時代には追いつけません。

戦前、電話線柱（木柱でした）を悪いのだけ建替えるか、年限がくれば一区間全部建替えるかのいずれにすべきかで、議論したことがありました。私は後者を主張しましたが、当時としては前者に落ち着きました。それも今の時代なら当然能率の高い後者に決定していたでしょう。

何はともあれ、技術の進展は大変なものです。

在学時代、本野先生からこんなお話を聞きました。先生がある会社を訪問され、一卒業生に会われた時のことです。その卒業生が「私は先生の講義のとおりの設計でこの機械を作っております。」と、即座に先生は「私の講義は基本でありそのまま実用するものではない実用に当たっては新たな着想を加えるべきだ。」と、技術改善の努力を教えられたと話されました。

技術は進歩します。いまだにこの言葉は忘れられません。

私は今会社で技術以外に労務も担当しておりますが、労働組合は金科玉条のように合理化に反対しています。その裏は首切り反対ということでしょうが、私共のように今の所経営の安定している会社では、そう簡単に首切りは出来ません。が併し、その表面の合理化にだけ反対しコンピューターの導入さえも強硬に反対しています。

技術の進展は省力化を生み、従業員には余暇が出来る、技術の進展によって生産性がアップされ、従業員に余暇が出来る。誠に結構な話なのですが余暇が出来、超過勤務が減り、労働条件は良くなって来るのですが、超過勤務手当が減る、これが又彼等の問題のようです。

非連続の時代と申しますか、この進展の烈しい技術社会において労働問題だけが徒に空転しているのは歎かわしいことです。

私もひとりの経営者です。会社の末長い繁栄、従業員の待遇、時にかみ合わない二つの間に入って頭を痛めます。

生産性をアップして、そのアップのもとで充分な待遇を与え、そしてまた、勤務時間を縮めて余暇を与え、労使共に共栄しようという私共の願望は、彼等の簡単に納得するところとなりません。

らっきょう会

東京支部（昭和九年卒）

河野勝也

昨年五月の支部総会で、年度グループ別同窓会の設立要請があり昭和八～十一年の会を「らっきょう会」と命名し、既に二回の会合を開いた。申合わせ事項次の通り

○会の名称を「らっきょう会」とし、ひらがなを用いる。

○昭和八年組を第一回幹事とし以後毎回昭和九・十・十一年組と回り持ちとする。

○開催時期、回数は「二・八・三もく」すなわち二月と八月の第三木曜日とする。従って年二回となる。

去る二月十九日、第二回らっきょう会が新橋の料亭「両国」に於て開かれた。

前回（二十四名）に比べ人数は少し減ったが、畳敷きにくつろいで「ちゃんこ鍋」をつつきながらさしつされつ話に花が咲き、幹事が閉会の切掛けをつかむのに苦労した。

出席者

昭八　小野恒造　久保久雄
　　田井梁之　西山安三
昭九　石川弘文　市村宗明
　　河野勝也　松井茂彦
昭十　有馬敏彦　大曲俊彦
　　小林大祐　清水威寛
　　高木正　林潔
　　山上隆也
昭十一　福光勉　直海登良衛
　　中山健一（以上十八名）

第十九回 洛友会総会通知

一　日時　六月七日（日）十時より十七時

二　会場　第一　新阪急ホテル（総会及び懇親会）
第二　万国博見学

三　日程
十時　関西支部総会
十時半　本部総会（近況報告他）
十一時半　懇親会及び昼食
十三時　新阪急ホテル出発
万国博見学（電力館他）
十七時　現地解散

四　配布資料
電気評論「万国博特集号」及び電力館のパンフレットと切符（電車・入場券）

五　会費
会員及び家族（大人）　一、五〇〇円
〃　（小学生）　一、〇〇〇円
昭和四十五年度卒業者　七〇〇円
会費は別紙振替用紙にてお払込み下さい
尚これをもって総会及び懇親会、万国博見学会出席ご通知に代えますので、五月十五日までに到着するようお願い致します。

六
本年度総会は万国博見学について、関西電力(株)芦原社長以下の方々より多大のご援助を頂き、又懇親会場と交通については京阪神急行(株)森社長にご便宜を与えて頂きました。本総会には、鳥養会長はじめ諸先生が多数ご出席されますので、奮ってご参加下さい。

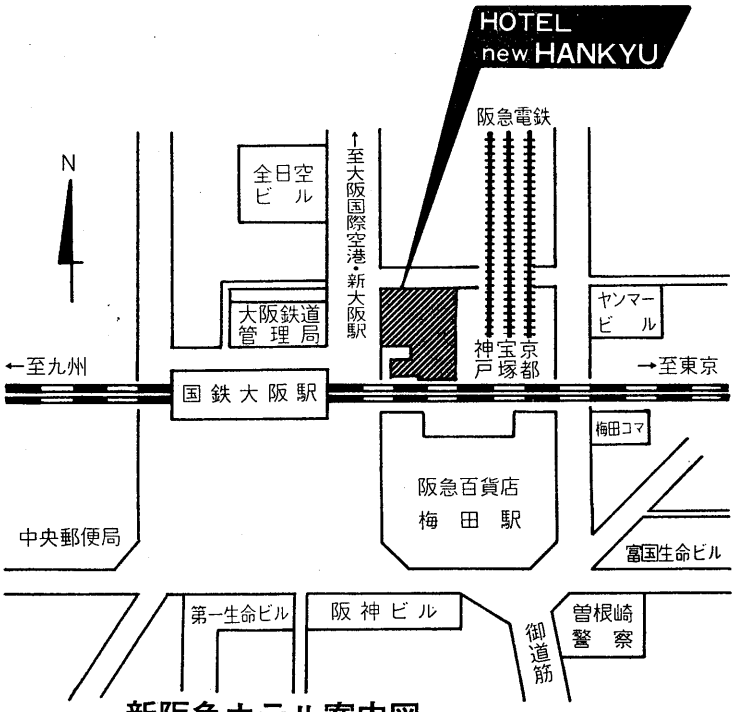
訃音

明45　真崎不二　45・1・20
昭21　松本　茂　45・1・29

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

洛友会行事予定

5・30（土）東京支部総会
5・31（日）中部支部総会
6・7（日）総会及び関西支部総会



新阪急ホテル案内図

編集後記

○本号は万博記念総会のご案内をかねて発行しました。巻頭に岡本赳先生よりご玉稿を頂き、先生のご健在を会員諸氏にお知らせすることを、喜びと致します。

○明治四十五年御卒業の大先輩、真崎不二氏が去る一月ご逝去遊ばされました。その追悼の記をご同期の古田正康様にお願い申し上げました所早速その思い出をお送り下さり、往時の京都大学を思い最近の大学紛争と比べ隔世の感を深くします。

○各支部より御投稿を頂きましたが、紙面の都合上本号には九州支部足立斌氏の雑感を掲載し、その他の方々のご投稿は次号にのせることになりました。悪しからずご諒承願います。

○洛友会の活動の源となる年度グループ別同窓会として、昭和八～十一年の〝らっきょう会〟が発足し既に二回の会合が行われた由東京支部の河野勝也氏よりその記録を送って頂きました。今後続々と若い層のグループの誕生を期待致します。

○本年の新卒業生の内住所の分って居る方々には会報をお送りしました。御誘い合せの上、総会にご出席下さい。
新卒業生は自動的に洛友会員に登録せられますので、お手数乍ら住所、勤務先をお知らせ下さると共に、振替用紙にて会費（本部会費七〇〇円支部会費五〇〇円計一二〇〇円）をご納入下さいます様御願いします。

（幹事　山本記）